

今年はお産ラッシュです

ルシャ地区には約10頭のお母さんクマが生息していますが、その内7頭のメスが16頭の子供を産みました。

2012年はカラフトマスの遡上が大幅に遅れて、多くのメスが子を失いました。2013年はメスたちのほとんどが単独になり、発情して交尾しました。

その結果、今年はいくつものメスが出産したのです。

頻繁に見られる5組の親子をご紹介します！



ワッキー親子 (10歳以上)

額の黒っぽいつむじが特徴。
ツキノワは幅広いエプロン状。
今年なんと、3頭も子供を連れていきます。



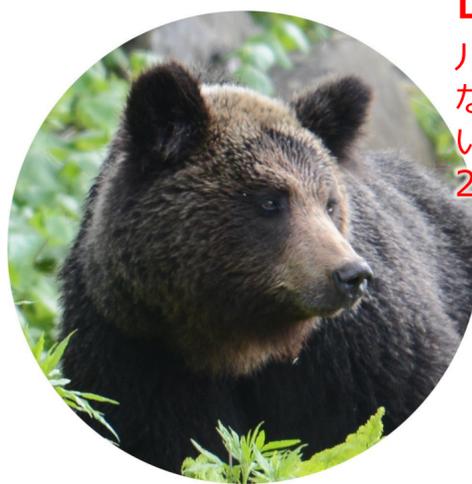
ハッチ親子 (7歳)

気の強いお姉さん。ツキノワが首の後ろまで回っています。
2回目の出産で、2頭の子を連れていきます。



BE親子 (15歳以上)

ルシャで最強のメス。ツキノワはない。鼻面が白っぽく、耳が大きい。
2頭の子を連れていきます。



リッチ親子 (10歳以上)

真ん中で別れて、右側が大きいツキノワが特徴。
大きさの異なる、2頭の子を連れていきます。



ドラム親子 (10歳以上)

右側が細長いツキノワが特徴。
ドラムはBEの娘です。
2頭の子を連れていきます。





2013年6月、メスグマと元気にたわむれていたオレンジ

コードネーム08B-8。耳につけたタグの色から、通称オレンジと呼ばれる大年寄りの雄ヒグマ。2008年に岩尾別で生け捕りした時、体重255kg、既に29才で歯もボロボロでした。40頭以上ものヒグマが集まるルシャ地区でも、彼は強い雄だったようです。2009年までに生まれた子グマの実に1/4は彼の子でした。ところが、2010年を境にして、彼の子はパツパツとみられなくなりました。かわって、多くの子グマたちの父親になったのは、はるか標津からやって来た体重405kgの大グマでした。この大グマは、2011年5月に標津町のNPO法人「南知床ヒグマ情報センター」が、役場や北大、NTTドコモらと共同で標識を付けて放ったところ、わずか6日間でルシャ近くまで移動したことが確認された個体でした。

年取ったオレンジは、若くて力みなぎるこの大グマとの勢力争いに敗れたのかもしれませんが。2012年の晩秋、冬眠前の丸々と太るはずの時期にも関わらず、33才になったオレンジはやせ気味で毛艶も悪く、元気なさげでした。ヒグマの寿命は条件の良い飼育下でも最長で40才前後。彼もそろそろ知床の土に帰る時期なのかなと感じたものでした。

翌2013年6月、私たちはメスグマと盛んに交尾しているオスを見つけました。何とそれはオレンジでした。よく太って毛も艶やか。前年秋のみすぼらしい姿とは見ちがえるようでした。「がんばれ爺さん、標津のクマに負けるな！」と思わず声援を送ってしまいました。

しかし、その後、オレンジは悲しい最期を迎えました。同年7月20日、大きな傷を負った彼が観察され、その後さっぱり姿を見せなくなったのです。1ヶ月後、やせ細った姿で彼が現れたのは羅臼の相泊でした。漁港近くに何度も出没し、オレンジは駆除されてしまいました。もしかすると、オスグマ同士の争いで傷を負い、大きく移動したのかもしれませんが。享年34才。

人に例えれば80才以上。悲しい結末ではありましたが、野生のオスグマとしては国内最高齢での大往生でした。

こんなことが分かったのは、ヒグマの遺伝子分析を行ったからです。私たちは圧搾炭酸ガスで特殊な注射器を発射して、針に残った組織からDNAを取る手法（ダートバイオプシ）を国内で初めて野生のヒグマで成功させ、ヒグマ社会の仕組みを明らかにしつつあります。

ルシャでは毎年数万人の人々が観光船などでヒグマ観察を楽しんでいます。また、現地の漁師の人々がヒグマと見事に共存している場所としても知られています。明治以来、多くの誤解と過剰な恐怖心から、人とヒグマは対立してきました。そんな悲しい関係を正し、かつてのアイヌの人々のように上手に付き合っていくためには、まず彼らの真の姿を知る必要があります。ルシャ地区は国内で唯一、ヒグマを学ぶ場となる可能性を秘めています。一方、国立公園の周辺地域では、ヒグマとの「折り合いの付け方」が大きな課題です。

自然教育への活用の可能性や地域社会とヒグマの共存対策を検討する上で、ヒグマが半島内最高密度のルシャ地区の実態を把握することはとても大切です。この地区でどのくらいの数の子グマが生まれ、どんな血縁関係にあり、どのように周辺へと移動していくのか、年取ったクマが日常の生息地から大きく移動することがあるのは普通なのか等々を把握することは、世界自然遺産を抱える地域社会として、ヒグマとの付き合い方を考えていくための基礎になるのです。



DNAサンプルを採取する注射器型のダート